# 天地燃える

下

南原幹雄

集英社

# 天地燃える

下

南原幹雄

集英社

天地燃える（下）

一九八五年九月一〇日　第一刷印刷
一九八五年九月二五日　第一刷発行

定　価　九八〇円

著　者　南原幹雄

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
〒101　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
出版部（〇三）二三八―二八四二
電話　販売部（〇三）二三〇―六一七一
製作課（〇三）二三八―二九六四

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©1985　M. NANBARA, Printed in Japan
ISBN4-08-772542-1　C0093

# 天地燃える（下）　目次

□陰謀 5
□東湖亭 22
□朝焼け 39
□入札 55
□隅田川 73
□討手 89
□暮春 112
□訣別 138
□九頭竜の洞窟 160
□裏切り 177
□明暦三年 199
□江戸燃ゆ 216

装幀　伴　颺

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 天地燃える　(下)

# 陰謀

野の風がひかる。
花がしきりに舞いおちている。
春たけなわ。野辺は遠くまで花におおわれている。
朝のうち野にたなびいていた霞はいつしか消え、視界ははるかにひらけていた。隅田堤の桜は今が満開である。
堤は大勢の花見客でにぎわっている。隅田堤は上野とともに、都人士がもっとも寄りつどう花見の名所である。
その隅田堤からやや奥へ入った寺島の野に、たえなる琴の音がひびいてきた。
桜並木のつづく野辺に緋毛氈がしかれ、綺羅をかざった女たちの集団がある。女たちは豪勢な重箱をたずさえ、山海の珍味をもりあげ、甘酒を盃にくみ、うっとりと周囲の景色に見とれ、琴の音色にききほれている。
緋毛氈に琴をよこたえ、かなでている女性は、一見して武家深窓の娘とわかる。年ごろまさに芳紀十五六であろうか。
周囲にむらがる女たちは、いずれも彼女の腰元やそれにつらなる末の者と見えた。
ひかる風のかなたに、綿のような雲がふんわりと浮いている。
木々の梢から春の鳥の声もきこえる。
駘蕩とした趣があたりをつつんでいる。
春の花見、秋の紅葉狩りは武家奥向きの恒例である。奥方や姫君などが腰元や老女らをともなって、下屋敷や野山へ一日の行楽にでかけていく。
むろん女ばかりの一行では不用心でもある。御役の侍たちがあまり目につかぬよう警固につき添うのがつねで

ある。
この場にも、緋毛氈にたむろして、わらいさんざめきながら花見をたのしんでいる女たちの陰に侍姿がところどころに見えた。
あでやかな染め模様の晴れ着小袖に身をつつんで琴をひくこの場の女主人公は、旗本五千石、北町奉行石谷左近将監貞勝の愛娘、清姫である。
石谷には二男二女の子がいるが、そのうちで長女の清姫をもっともいつくしんでいる。明眸皓歯のたとえがいかにもふさわしい美貌の姫である。眸のかがやきにも人柄のよさと利発さをうかがわせるものがある。
石谷は今年丁度四十歳をむかえ、切れ者の評判たかい幕臣である。文武ともにすぐれ、江戸の行政、司法、警察をつかさどる長官としての適性も十分にそなえている。
同役の南町奉行神尾備前守元勝が寛永年間に任官していらいその職にある老人でやや頑迷のそしりをうけているのにくらべても、石谷のほうは各方面から手腕を期待されているのだ。
清姫のかなでる曲がおわった。
お付きの腰元たちは手を打ち、やんやの喝采をおくった。
世辞をぬきにしても、清姫の演奏は見事なものであった。清姫は弥生三月にちなんだ桜の曲をひきおえ、周囲に笑みをもらした。
そのとき、用人の宇津木定五郎がやってきた。
「姫さま、むかえの乗り物がまいりました。時刻もぼつぼつ」
と帰邸の時刻がちかづいたことを宇津木は告げた。
まだ日は高い。ようやくかたむきだしたばかりである。
「もう、むかえが……」
清姫はやや不機嫌な色を見せた。
今日、一行は暁におきだし、日がのぼってきたころ、神田駿河台の屋敷をでて菩提寺がちかくにある隅田堤へむかった。花見の準備を二日も前からはじめていた。
その仕度が大変だったのにくらべて、花見にすごした時間があまりにあっけなかった。これは毎年のことである。
「そろそろかえり仕度をいたしまして、丁度よろしゅうございます」
用人の宇津木は気の毒そうな顔を見せ、なだめるようにいった。
「ようやく桜狩りが佳境に入ったところだというのに」

清姫はぐずっていった。こういうところは、利発といわれながらもまだねんね気分をのこしている。
「日のあるうちにお屋敷にもどりますには、今ごろから仕度いたしませんと」
宇津木は清姫をたしなめた。
腰元たちもいっせいにかえり仕度をはじめた。
乗り物は菩提寺福光寺に待機していたものがむかえにきたのだ。
乗り物をかつぐ陸尺(ろくしゃく)は朝きたときの者とかわっていた。陸尺は雇い人であるから、顔ぶれがかわることがしばしばある。
清姫以外はみな歩行(かち)である。
まず清姫が乗り物にのった。
福光寺の住職に挨拶するために、乗り物だけがやや先にでた。
大騒ぎがおこったのは、それから間もなくのことだった。
清姫をのせた乗り物とまるで入れかわりのように、一丁の乗り物が入ってきた。
「おわすれ物でもなされたのか」
宇津木は清姫がもどってきたものとおもったが、そうではなかった。
「清姫さまをおむかえにまいりました」
陸尺の言葉に宇津木は驚愕し、顔色をうしなった。しかもその陸尺は朝きたときとおなじ者たちだ。
「姫さまは今、おでになられた。そのほうたちは」
宇津木の言葉に今度は陸尺たちがおどろきの色を浮かべた。
「わたしどもは今はじめておむかえに」
「ならば今しがた姫さまをむかえにきた乗り物は?」
「偽物でございます」
陸尺たちの声はふるえていた。
「一大事じゃ、姫さまがあぶない。みな、さい前の乗り物を追え!」
宇津木は悲痛な声でいった。
その声に応じて、数人の侍たちが駆けつけてきた。警固の役目で屋敷からついてきた者たちである。
「乗り物を追えっ、乗り物をさがせ!」
宇津木はさけんだ。
侍たちはただちに追跡と捜索を開始した。
あたふたとはしりまわる者もいた。
「清姫さまがっ……」

腰元たちはみな泣きそうな顔をして右往左往した。
警固の侍たちも、腰元たちも必死になって清姫の乗り物をさがしまわった。たのしくにぎやかにすごした花見の一日も、最後になって一変した。
隅田堤一帯をくまなくさがしたが、清姫の乗り物についての消息はなに一つ得ることができなかった。忽然(こつぜん)とどこかへ消えてしまったのだ。
春の夜がくれるまで、さらに夜半にいたるまで捜索をつづけたが、むなしいままでおわった。
清姫をつれ去った陸尺についても手がかりはまったくつかめなかった。
「宇津木、切腹は無用じゃ。かたく申しつけるぞ」
用人として花見の行楽を指図した宇津木は、夜半すぎにはすっかり憔悴(しょうすい)して、口もきけないまでになってしまった。宇津木の様子を見て、石谷はまずきびしく命じた。
宇津木の家は代々石谷家に用人としてつかえており、その忠勤ぶりを買われていた。実直と真面目さが取り柄であった。それだけにはやまったことをしそうな気配を石谷は感じたのだ。
「姫さまの消息がわかるまで、軽はずみなことはいたしませぬ」
とこたえた宇津木だったが、すでに動転して落ち着きをうしなっていた。
腰元たちも清姫の生死を案じて泣くばかりであった。
こともあろうに、町奉行の息女をねらって拉致(らち)したのであるから、どのような者であるにしろ、それ相当の覚悟をして実行したのはあきらかだ。大胆不敵な者たちであることが想像された。
石谷は自分の居室にこもって、誰も入れなかった。
妻女の静香は暁をむかえたころ、とうとうたおれて、床についた。
石谷は居室でひたすら思索をめぐらした。彼はこの一件を、町奉行にたいする挑戦だとうけとめた。
石谷は三十代半ばの年で旗本の出世の最高峰ともいうべき町奉行にまですすんだ男であるから、政敵といえる人物は何人かいる。
立場と役職上、恨みを買うおぼえはあって当然である。同輩や先輩からそねまれている可能性も十分ある。
石谷は思索をかさねていった。
そのうちに、しらじらと外があけてきた。
屋敷の者たちは、夜明けを待って、はやくも捜索にうごきだした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

町奉行所の公的機関をつかうなら、捜索はお手のものである。
石谷は自分の娘の捜索に公的機関をつかうべきかどうか、多少の逡巡があった。
日がだいぶ高くなったころ、屋敷内に何か事件がおこった様子が石谷に感じられた。
なんとなく、騒ぎたつ妙な空気が部屋の中にいて感じられた。
廊下をつたう足音がきこえたのは、その後間もなくだった。
足音はしだいにちかづいてきて、石谷の居室の前でとまった。
それよりすこし前……。
日が高くなりかけた神田駿河台の武家小路に、おかっぱ頭に筒袖を着た四五歳の童女があらわれた。
手にきれいな紙でつくった風車をもっている。あどけない表情をした顔だちのいい童女である。
風車が風に舞っている。
童女は童謡を口ずさみながら四辻をまがった。
まがった先のところが、石谷左近将監の屋敷である。
童女はうたいながら石谷の屋敷にちかづいてきた。
屋敷の門番が童女に目をとめた。
童女も六尺棒を持った門番に気づいた。が、怖じ気はまったく見せなかった。
かえって、にこりと頬笑んだように見えた。
門番もおもわずわらいかえした。
童女はそのまま門番にちかづいてきた。
「おじちゃん、お手紙……」
童女は門番にそういった。もう片方の手に結び文のようなものを持っていた。
「どうしたんだ、その手紙」
門番はたずねた。
「知らない人にたのまれたの」
屈託なく童女はこたえた。
「どこで？」
「あっち」
童女は今きた方角を指さした。
門番はそちらをながめたが、むろん誰もいなかった。
彼は童女がさしだした結び文をうけとったものかどうかまよっている様子だ。
「どういって、たのまれたんだね」
「つぎの角をまがったところの大きなお家の、門のそば

に立っているおじちゃんにわたしてくれって」
門番もそれ以上は聞きようがなかった。
「じゃあ、見せてごらん」
そういって門番は結び文をうけとり、ひらいていった。
童女はそれで安心して、また風車をまわしながら石谷家の前をはなれていった。
門番はそれを見おくって、結び文に目をとおした。
読み終えた門番の顔色はかわっていた。

姫君あづかり申し候
さわぎはきつと無用のこと
追つて連絡いたすべく候
石谷どの

それだけが全文である。
清姫の拉致を通告してきた文だ。
門番は外を見た。
くだんの童女の姿はもう見えなかった。たとえ見えたにしても、童女は本当にたのまれただけにちがいなかった。
門番はとるものもとりあえず、屋敷にかけこんだ。

「ご用人さま」
門番は宇津木を呼んだ。
宇津木はそのとき自室にこもって苦悩していた。むろん、昨夜は一睡もしていなかった。
宇津木は自室からでてきて、門番からその結び文をうけとった。
そして一読、彼も驚愕したのであった。
石谷は自室の中で、足音から宇津木だと察した。
「何用じゃ」
石谷は宇津木を招じ入れてたずねた。
「大変なことがおこりましてございます」
「いかがいたした」
「ただ今、このような結び文が屋敷の門番にわたされました」
石谷は手わたされた結び文を読みおわって、唇を一文字にとじた。言葉は一言も発しなかった。
「さらわれた……」
しばらくたってから、石谷は無念そうにもらした。
「どんな奴ばらかおわかりでしょうか」
「わからん」
石谷は見当がつかなかった。

「この門番には他言いたすなと命じてあります」
とはいっても、屋敷の中にはすでに微妙な空気がひろがっているようだ。
「卑劣なしわざだ」
石谷は怒りの言葉を吐いた。
「卑怯千万なやつらです。罪もなにもない姫様をかどわかすとは。まことにおいたわしい」
宇津木もふだんからことのほか清姫を可愛がっており、かどわかした者たちへの憎しみは父親の石谷にもおとらなかった。
「追って連絡がくるそうだ。それを待つしかあるまい」
憎んでもにくみきれぬ相手だが、清姫を人質にとられている以上、手も足もでぬ。町奉行といえども、どうすることもできないのだ。
その口惜しさが怒りを何倍にもした。
町奉行本人でありながら、このような罠におちいったことは痛恨のきわみである。
「与力、同心らをひそかにうごかしましてはいかがでございましょう」
当然一考すべき価値のある方策である。
「それは止したほうがいい。公私のけじめはつけねばならぬし、かえって相手を窮地へ追いこむおそれがある」
今のところは、相手の出方を待つしかあるまいと石谷はおもった。
「しかし、清姫さまの身をおもえば、いてもたってもおられぬ気持ちです。ただ待っておるのは業腹でございます」
宇津木は切歯扼腕のていだ。
石谷は定廻りや勤廻りの与力をうごかすことは今のところかんがえなかったが、自分の直接の家臣である内与力の大里覚兵衛を呼んで、ひそかに事態をつげた。覚兵衛に内偵をさせておくことは無駄ではなかった。
その日の夕方。
石谷家の女中が使いのかえり、勝手口のゴミ箱に封書がおかれているのに気づいた。
女中は不審におもって、封を切らずにそのまま女中頭の手をとおして、奥方の静香へそれをわたした。

明朝　卯の刻　伝通院大黒院の前にきたるべし　清姫どのおわたし申すべく候　きつと一人にてきたるべきこと申しあげ候
石谷どの

手紙の文面を見て、静香は顔面蒼白となって石谷の部屋にかけこんできた。

東の空がどことなく明るみをおびてきて、春暁がおとずれた。

庭の梢の影もようやくかすかに見えてきた。その周囲には薄霞がおりている。

空にはまだ明星があざやかにまたたいている。

石谷は一人、明星をあおいで屋敷をでた。

清姫を拉致した者たちに呼びだされて伝通院へでかけたことを屋敷でも静香以外は誰も知らぬ。

石谷は宇津木にもいわなかった。打ち明ければ、たった一人でいくことを必死に諫言されることがわかりきっていた。

暁の空はおぼろである。

あるいているうちに、はじめはぼんやりとしていた道筋の風物の輪郭がしだいにはっきりと見えてきた。

伝通院は小石川にある浄土宗の巨刹である。無量山寿経寺と号す。家康の生母伝通院殿（お大の方）や三代将軍家光の御台所本理院殿をまつっている。

神田から小石川への道にはまだ人影は見えぬ。

わずかに、石谷の約一町ほど後ろを早おきの百姓が一人鍬をかついであるいていた。

かなりあるきつづけるうちに、夜気ははらわれ、朝の光がさしてきた。

光の中に伝通院の伽藍のイラカが見えてきた。

石谷のこころは不安で揺れてきた。

はたして清姫は無事であろうか。

相手方は自分にたいして、どんな難題をもちかけてくるのだろうか。金か、それとも政治的な取り引きか。

いろいろな臆測が石谷の胸中にめばえた。

伝通院にいたる前に森がある。ケヤキの森と呼んでいる。

迂回してもいかれるが、石谷は森をつきぬけようとした。

森の中に小径がある。小径の中ほどに地蔵堂が見えてきた。

地蔵堂の前まできたとき、

「石谷左近将監」

とつぜん背後から声をかけられた。

石谷は後ろをふりかえった。

「石谷、よくきた」
「待っていたぞ！」
背後に数人の男がいた。
「娘は無事か。用件をいえ」
石谷は臆することなく声をはなった。
相手はいずれも一癖ありげな屈強な者たちだ。
「娘は無事だ。そのかわりにもらいたいものがある」
「何だ」
「奉行どのの命がほしい」
正面の男がいいはなった。金でも取り引きでもなかった。
「馬鹿な」
と石谷がいったとき、背中のほうで地蔵堂の扉のひらく音がきこえた。
「石谷左近将監、死んでもらいたい」
ふりむくと、地蔵堂の中から四五人の男たちがばらばらと飛びだしてきた。みな抜き身をひっさげている。
「娘をだせ！　勝負には応じよう」
石谷がいいおわるのを待たず、前後からわっと男たちは押しつつんで斬りかかってきた。
やむなく石谷は一刀をぬいた。

三月にはめずらしい武家の祝言がおこなわれた。
弥生三月を桜にたとえ、
〈散りやすし……〉
といって、武家ではこの季節の祝言をきらう風習があるのだ。
新郎は御書院番士秋野佐次郎、新婦はおなじく御書院番士高田勘左衛門の娘多紀である。
三月雛祭の夜、秋野家の当主三郎兵衛がとつぜん病を発し、数日間高熱をつづけたあげく、吐血して、七日めに他界してしまった。
秋野家では父祖の代から御書院番士をつとめている。御書院番士は旗本の中でも名誉ある身分である。戦時において御小姓組とともに将軍をまもり、平時においては営中の要所をかため、将軍が出行するときは御小姓組とともに護衛の任にあたる。いわば将軍の親衛隊である。
秋野家は葬儀をだしてから、初七日すぎに今度は祝言の披露をおこなった。長子相続がみとめられ、嫡男の佐次郎が父のあとをついで御書院番士に任じられた。
左次郎にはかねて許婚の相手多紀がおり、異例の葬儀直後の祝言ということになったのである。

仲人媒酌は、秋野の上司の御書院番頭小野川真吾がつとめた。

小野川は今年五十二歳、すでに部下の媒酌を三度つとめたことがある。したがって儀式万端を遺漏なくとりおこなった。

下谷にある御書院番組屋敷の秋野邸で祝言はおこなわれ、夕刻まぢか、小野川は妻女てるとともに帰途についた。

小野川は黒羽二重の紋付小袖に麻上下、白足袋、草履の正装に身をつつんでいる。おてるも夫に合わせた容儀でしたがった。

晩春の日が落ちなずんでいる。春の日がなかなか暮れぬのを遅日という。

すでに花も散り、上野の山も葉桜におおわれている。

小野川の屋敷も下谷にある。組屋敷からあるいてほどないところだ。

春の風が頬をなぶっている。

小野川は祝儀の酒でいくらか酔いどこちになっていた。

御書院番士はいずれも武芸練達の者がなる。まして、番頭となればなおさらだ。

番頭は六人おり、小野川の年齢、経歴などは中ほどであるが、声望や武芸では他を圧し、随一だといわれている。

幕閣からの評判もいい。

旗本屋敷の家並みに入った。

ようやく夕暮れの空気があたりをおしつつんできた。俗に逢魔ケ刻とよばれる頃合いである。

そのとき、前方に人影があらわれた。三人である。いずれも武士だ。

距離がちぢまるにしたがい、小野川は妙な感じをおぼえた。

いやな気がした。三人とのあいだで、何かおこるようなおもいがした。

「おてる、はなれていろ」

小野川はとっさにいった。

相手が三人でも十分にたたかえる自信があった。

小野川のわるい予感はあたった。

が、はじめにおそいかかってきたのは、前からくる三人ではなかった。

前の三人に気をとられていたがために、小野川は背後からせまっていた二人に気がつくのがおくれた。

むろん、それが相手方の作戦であった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.